保険毎日新聞「みちくさ保険物語」114

戦前の生命保険募集　セールスマン社「保険かがみ」

読者の方から「音楽お好きなのですね」としばしば尋ねられる。そんな場合、質問された方はいずれも「音楽好き」だ。時間があれば、読者の皆さんと保険ではなく音楽の話をさせていただきたいところである。コロナ対策について先が見え始め、演奏会にふたたび足を運ぶ人も多くなってきたであろう。皆様が、貴重な音楽や演劇に巡り合えますように。

さて、毎年桜とともにやってくる「東京・春・音楽祭」の開期がもう半分過ぎてしまった。しかしこれからシーズンオフにかけて、素敵なコンサートが目白押し。新国立劇場では、ヴェルディの「アイーダ」と「リゴレット」（新製作）があり、「サロメ」「ラ・ボエーム」と続く。NHK 響の 4 月の定期には、前のシェフのパーヴォ・ヤルヴィがやってくる。すべてを鑑賞することはできないが、接することのできた機会を大いに楽しみたい。

この連載で、音楽談義をするわけにはいかない。だが、3 月末に素晴らしい才能をもった音楽家である坂本龍一が亡くなったことには触れておきたい。彼の活動は、狭い意味でクラシック音楽に限らず、映画など幅広いものがある。だが、音楽史の中に名を残す類まれなる才能であったと思う。

追悼の気持ちを込めて、坂本龍一が作ったピアノ作品（習作を含めてほぼ全曲）が収録された CD を聴いた。近代フランス音楽に影響された感覚を、グローバル社会の現代性に盛り込んだ、短いけれど素敵な曲が多い。私の趣味をいわせていただければ、高橋悠治編曲の「グラスホッパーズ」や「リヴァー」がいい。彼のピアノ曲は多くなく、全作品でも 1 枚の CD に収録できる。なお、昨年の暮れに彼の自作自演（スタジオ収録）が NHK で放映されたようなので、テレビでも見られるはずだ。この場をお借りして、偉大な芸術家のご冥福をお祈りします。

前回までの連載では、第一生命と千代田生命という二大相互会社を除く、中小相互生命保険会社 5 社について触れてきた。最後に、これら 5 社が合併してできた昭和生命保険相互会社について説明して終わる必要があるが、これについては少し後回しにして、今回は、保険募集に関する戦前の史料を紹介することにする。

当時の保険募集人が販促用の資料をどのように入手したのかはっきりしていない。というのは、当時の保険募集人体制が、現在のような保険会社が直接雇用する営業職員による体制ではなく、多くの「手下」を抱える有力な保険募集人が、保険会社との間で「契約」していたことが多かったためである。個々の会社に特有な「営業案内」のようなものは、会社から（無償あるいは有償で）支給されたが、生命保険の効用を説明する資料などは、必ずしも保険会社から無償でもらえるものではなかったようだ。

今回紹介するのは、『保険かがみ』とういう 6 枚セットの絵葉書大のカードである。杉並区下高井戸に所在するサラリーマン社が発行し、1 部 25 銭、50 部だと 10 円となっている（画像 1 を参照）。このことから、特定の保険会社から依頼されて製作されたものではないことがわかる。ちなみに、同社は、『サラリーマン』という雑誌を昭和 3 年から発行してい

たサラリーマン社と同一であると思われる。サラリーマンは和製英語であるが、当時はまだ生まれたばかりの新鮮な用語だった。

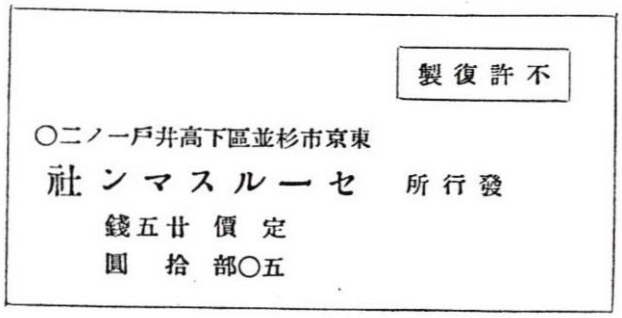
一枚目（画像 2）は、小さな傘に家族四人が寄り添うところに、大きな傘をもった人が話しかけている図。「用意なき人がぬれ行く時雨哉」という俳句が添えられている。家族も増えて、そろそろ保険の見直しが必要だと感じる人にはぴったりの販促資料だ。「結婚当時の少額契約」という傘の家族は、洋装で描かれており、保険と都市生活者の結びつきが暗示されている。

だが、大口保険を契約するためには、「保険料が増額になる」と躊躇する見込み客には、裏面を見せると効果的。裏面には、「僅少の保険料は人生の太陽なり」として、母子が「保険金」と書かれた太陽に向かっている絵がある。あわせて愛児の成長のための将来の備えの大切さが強調されている（画像 3 を参照）。

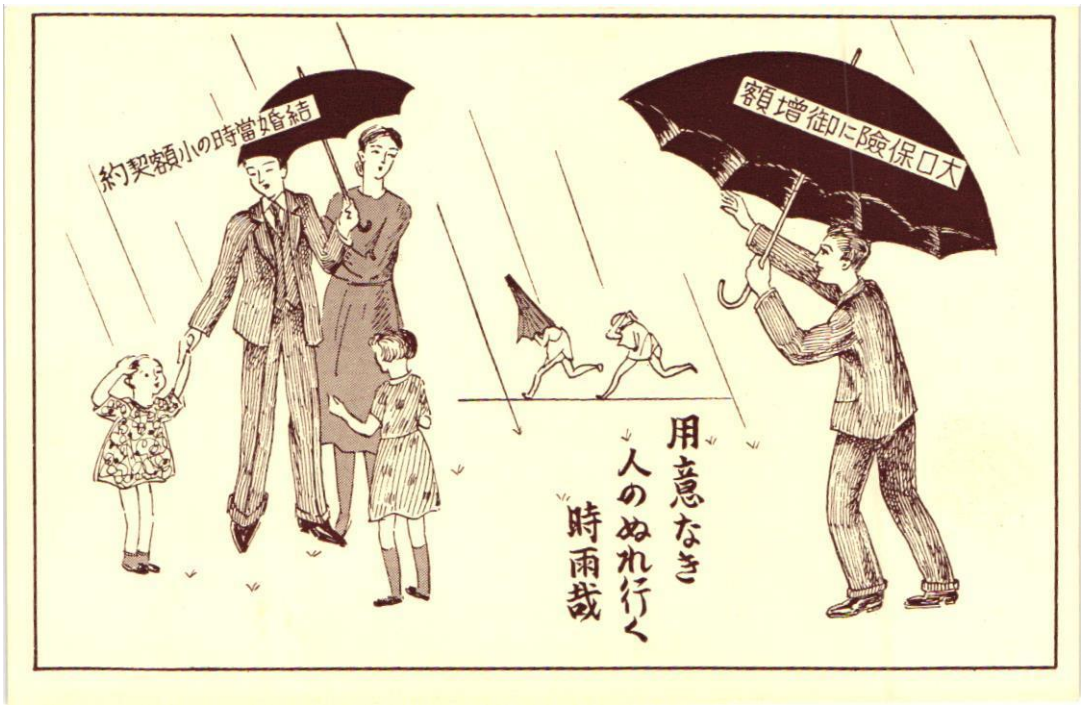
次のカード（画像 4）は、様々な重荷を背負って歩いている人に、「生命保険」と書かれた人が、「その荷物私が持って上げませう」と呼び掛けているものだ。持っている荷物には、「子供の教育」、「家族の扶養」、「老後の用意」などの他、「事業の保障」や「相続税」まである。この販促資料の狙いは、裏面を見ればわかるように、生命保険の特長を説明することにある。裏面では、様々な場合における、生命保険、貯蓄、株式の対応について、一覧表で示されている（画像 5 を参照）。この一覧表は、生命保険が貯蓄や株式と比較して、萬一の場合に優れた手段であり、かつ安全で継続性があり、有利な「貯蓄手段」であることを強調している。

たとえば、「萬一の場合」、生命保険は「保険金が支払われ即時役立つ」とあり、貯蓄は「元利金のみ」そして株式は「時価で売るより方法なし」とある。たしかにそうではあるが、生命保険の死亡保障は、死亡保険料というコスト（自分が死ななければ他の死亡者に保険金として給付される）を支払っている。死亡保障にコストを支払っているということについては触れられていないのである。「安全性」という項目では、生命保険と貯蓄は「安全」だが、株式は「危険多し、騰落に神経を悩ます」とある。戦前には、生命保険契約者保護機構も預金保険もないため、破綻確率を考慮するとどれだけ安全が保障されていたのか怪しい。これに対して、株式が危険（変動）は多いが、分散投資するならば、安全でないということはなかったはずだ。租税や相続税の項目に関しては、生命保険を優遇する制度があったため、一覧表の指摘で間違いがない。

以上のように、一覧表は、必ずしも間違いではないが、生命保険商品を他の金融商品と比較して有利なものであるという印象づける意図で書かれていることは明らかである。第 2 枚目のカードの裏表は、保険募集人がうまく使いこなせば、契約の成立に結びつけるための有力な資料となりうるものである。見込み客には様々なタイプがいるはずだ。残りの 4 枚のカードについては、次回以降に順を追って紹介させていただく。



画像１　『保険かがみ』の袋の裏面（部分）



画像２「用意なき人のぬれ行く時雨哉」『保険かがみ』（サラリーマン社）に収録。

保險金

(僅少の保險料は人生の太陽なり)

愛兒の教育準備は充分ですか？

教育は勿論萬能ではないが併し最も有力な武器である。

現在年齢	小學卒業迄	中學卒業迄	專門學校卒業迄
8	1,215 圓	2,493 圓	3,356 圓
9	1,041	2,397	3,312
10	857	2,239	3,267
11	662	2,188	3,218
12	454	2,073	3,166
13	234	1,952	3,112
14	—	1,822	3,052
15	—	1,500	2,805

◇一ケ年平均學費
小學校時代　二〇圓
中學校時代　三五圓
專門學校時代　五〇圓

◇各年齡ノ者ガ入學當初ニ備フベキ元金

◇年利六分、年二回折返シ複利計算ニ依ル

(簡易保險局發表)

◇例へば8歳の時に3,356圓宛て貯きとれを六分で利殖すれば專門學校卒業迄の學費は充分支拂できる。

中途廢學者の割合 (最近五ケ年全國帶大平均)	
家庭の事情	五三四人
授業料不納	二〇〇人
	七三四人
死亡	一三六人
疾病	八三人
轉學	二〇人
學業不振	一七人
不正行爲	八人

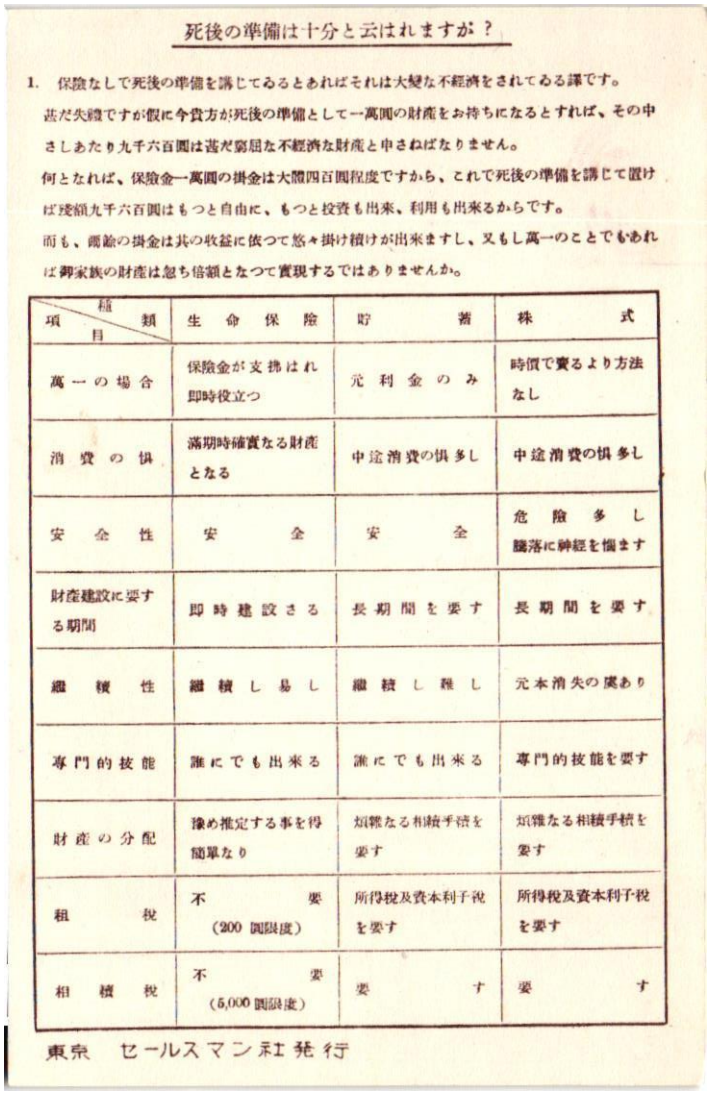
(千人統計)

◇折角大學の登龍門をくゞり乍ら一家の經濟的破綻の爲難關空しく悲淚に咽ぶ若人は中途廢學者千人中七百三十四人の多數を占める。

東京　セールスマン社発行

画像３　画像２裏面『保険かがみ』（サラリーマン社）に収録。

画像４「その荷物は私が持って上げませう」『保険かがみ』（サラリーマン社）に収録。



死後の準備は十分と云はれますが？

1. 保險なしで死後の準備を講じてゐるとあればそれは大變な不經濟をされてゐる譯です。
甚だ失禮ですが假に今貴方が死後の準備として一萬圓の財產をお持ちになるとすれば、その中さしあたり九千六百圓は甚だ窮屈な不經濟な財產と申さねばなりません。
何となれば、保險金一萬圓の掛金は大體四百圓程度ですから、これで死後の準備を講じて置けば殘額九千六百圓はもつと自由に、もつと投資も出來、利用も出來るからです。
而も、郵簡の掛金は其の收益に依つて悠々掛け積けが出來ますし、又もし萬一のことでもあれば御家族の財產は忽ち倍額となつて實現するではありませんか。

種類 / 項目	生命保險	貯蓄	株式
萬一の場合	保險金が支拂はれ即時役立つ	元利金のみ	時價で賣るより方法なし
消費の惧	滿期時確實なる財產となる	中途消費の惧多し	中途消費の惧多し
安全性	安全	安全	危險多し 騰落に神經を惱ます
財產建設に要する期間	即時建設さる	長期間を要す	長期間を要す
繼續性	繼續し易し	繼續し難し	元本消失の虞あり
專門的技能	誰にでも出來る	誰にでも出來る	專門的技能を要す
財產の分配	豫め推定する事を得簡單なり	煩雜なる相續手續を要す	煩雜なる相續手續を要す
租稅	不要（200 圓限度）	所得稅及資本利子稅を要す	所得稅及資本利子稅を要す
相續稅	不要（5,000 圓限度）	要す	要す

東京　セールスマン社発行

画像５　画像４の裏面　『保険かがみ』（サラリーマン社）に収録。